遠藤英樹＝編著

アフターコロナの観光学
―COVID-19以後の「新しい観光様式」―

2021年12月発行
本体2,600円＋税
新曜社
ISBN 978-4-7885-1747-9

矢ケ崎紀子
YAGASAKI, Noriko
東京女子大学現代教養学部国際社会学科コミュニティ構想専攻教授

社会学や人類学を専門とする教授等13人による論考である．コロナ禍において，観光は「不要不急」の活動と位置付けられてしまったが，筆者達は，これまでの観光を通じて，私達が「移動の自由」「集う自由」「遊ぶ自由」という人間社会を構築するエッセンシャルなことを獲得してきたことを重要視し，これを簡単に手放して良いのか？との問いを投げかけている．三密を回避する感染症対策はDXの進展とその影響を加速させ，他者との距離を調整することが常態となっている．こうした社会の変容の中で，観光が，観光客，地域の自然や文化，住民にとって何をもたらすのかを，社会学や人類学の視点から再考した書籍である．本書の言葉を借りれば，「社会」「他者」「モビリティ」「リスク」「デジタルテクノロジー」「歓待」「主体性／受動性」「地域（ローカリティ）」「パフォーマンス」等をキーワードとしたラディカルな再考である．

本書は，「Ⅰ部　アフターコロナの観光に関する社会理論」，「Ⅱ部　アフターコロナの観光に関するフィールド的考察」の二部構成である．Ⅰ部は『1章　「歓待を贈与する観光」へのディアレクティーク』から始まり，その冒頭には，著名な社会学者であるジョン・アーリが提唱した「モビリティ・パラダイム」が紹介されている．“「社会的なもの」（the social）の在処がこれまでの（移動しないこと〔インモビリティ〕を基本とする）「社会」から，「モビリティ」へ変化しつつある”（pp.25-26）という概念である．アーリは観光というモビリティ（ツーリズム・モビリティ）こそが「社会的なもの（the social）」を明白に表すと考え，これに基づいて多くの社会学者が観光分野に対する関心や問題意識を構築している．この章では，COVID-19のウイルスはツーリズム・モビリティによってもたらされ，“観光は世界に対して，ウイルスによるリスクを贈与した”（p.30）とされる．このような事実認識に基づき，さらに，デジタルテクノロジーの進展がモビリティに大きな影響を与えていることを踏まえ，アフターコロナの観光が地域の文化や自然を見るだけでなく，それらをコンテンツに昇華し観光客に多様な経験を提供して感動を与えていく，という新しい観光様式になると指摘されている．本章の論考はさらに進み，観光客が自らに感動を与えてくれた地域の文化を大切にしたいという思いを抱く段階を，観光客から地域への歓待であると表現している．地域の文化が大切にされると地域の自然を守ることにつながり，“文化が自然に歓待を贈与”（p.35）する．こうしたつながり（ネットワーク）は観光産業の活性化や地域社会の暮らしの向上へと広がっていく．これを「歓待の贈与のネットワーク」と表現しており，“リスクの贈与をコントロールし，歓待の贈与へと弁証していく”（p.37）ことが肝要と主張されている．

以降，「メディアと化す旅／コンテンツと化す観光 ――バーチャル観光による「体験の技術的合成」を考える」，「アフターコロナ期に向けたオンラインツアーの仕組みづくり」，「ソーシャル・ディスタンスはなぜそう呼ばれるか ――旅を再想像するための一考察」，「選択に至る過程 ――あるいは〈ともにある観光者〉への想像力について」，「観光研究の存在論的転回 ――非－人間的存在（新型コロナウイルス）と観光」，「リスク社会と観光 ――COVID-19危機のなかの観光について考える」とⅠ部は続き，Ⅱ部では与論島，浅草，ジョージタウン（マレーシア），インドネシア，北タイ山地民カレン，マッカ巡礼を対象とした論考が収録されている．

本書には，アフターコロナの観光の方向性を考えるための参考となる示唆が多く含まれている．観光のレジリエンスについてインドネシアの事例から分析した章もある．私自身も，久しぶりにジョン・アーリの書を紐解き，観光への多様なアプローチを楽しみながら，今後を考えていきたいと思った．